Piercing

@kyo

Piercing

変わったプレイをしましょう、と性行為の始まりに口にしたシュウがグラスに盛って持って来たのは、透明度の高いロックアイスだった。

酒を嗜むにしてもワインばかり。ウィスキーや焼酎といった氷を加えて飲むような強い酒を好むでもない。確かにその氷はワインのボトルを冷やすのに必要であったかも知れなかったものの、そもそも小一時間ほどでボトル一本を空にしてしまう男。常に酒量を一定に保っているシュウが、もしボトル一本以上のワインを口にすることがあるのだとしたら、それはイベントごとなどでマサキが酒に付き合う時に限られる。そうでもなければ使われないまでに、シュウはワインのボトルをロックアイスで冷やしながら飲むことをしなかった。

常備されているにしては不自然な時期にあるロックアイス。だからマサキは、恐らくシュウは性交で使う為にわざわざ用意したのだろうと考えた。

「……何をするんだ？」

「それはこれからのお愉しみですよ」

さりとて何をするつもりなのか、性行為の経験に乏しいマサキにわかる筈もない。シュウ以外に性交の相手を持ったことのないマサキにとって、シュウがこうして提案してくるプレイはどれも初めて経験するものばかりなのだ。煙草の煙を吸わせ合いながらの口付けもそう。眼球を舐め合いながらの口付けもそう。目隠しに手枷。ローターにバイブ。どうやらシュウには軽い加虐の気があるようだったが、マサキの身体に傷を付けるような真似までは流石に躊躇われるのか。手を出すつもりはないようだ。

だからこそマサキは途惑いながらも、シュウの行動を待った。そう酷いことにはなるまい……広く深いグラスに盛られたロックアイスが、ほら――というシュウの声とともに抓み上げられたかと思うと、捲り上げられたシャツの下で尖っている乳首に当てられた。

冷えた感触に、う……と、マサキは声を上げて身を竦めた。

冷たいと口にすれば、少しの辛抱ですよとの返事。そうは云われても氷を当てられているのだ。じっとしていようにも、身体が勝手にしなってしまう。そんなマサキの

姿を見下ろしながら、ゆっくりと。シュウがロックアイスの先端でマサキの乳輪をなぞり始める。

ひくり、と震えてしまう身体。

肌の熱でじんわりと溶けてゆく氷の感触は、やがてマサキをその行為に夢中にさせた。触れるか触れないかの距離。さわさわと乳首に触れてくるロックアイスは、まるで冬の行為の最中のシュウの肌の温もりのようにも感じられる。乳輪をなぞっていたかと思えば、乳首を撫で上げ、そしておもむろに乳頭を突いてくる。右の乳首をそうして嬲っていたかと思えば左。冷えて感度を失った頃合いを見計らって嬲る場所を変えるロックアイスに、身悶えては右、腰を跳ねさせては左。それはいつかのシュウの愛撫にも似た動きで、執拗にマサキの乳首を嬲った。んん、ぅん……その都度、マサキの胸を濡らしてゆくロックアイス。なだらかな身体のラインを伝い落ちる溶けた氷の残滓がベッドに滲みる頃ともなれば、マサキの口元は緩みがちになっていて、

——あ、あぅ……っ……

くぐもった喘ぎ声。いつしかマサキの男性器は、服の上からでもわかるまでの昂り

を見せていた。そこにシュウの手が伸びてくる。我慢の利かない子ですね。そう云ったシュウが、マサキに考える暇も与えずに、下着ごとズボンをずり下ろしてくる。露出する男性器。どうしようもなく膨張している男性器は、少しの刺激でもその精を吐き出しそうだ。

——あ、ああ……っ！

切なげに汁を吐き出している亀頭の先に、容赦なく押し当てられるロックアイス。瞬間、衝撃がマサキの身体を貫く。落ち窪んだ先端を押し開くように、ロックアイスが何度も捩じり込まれる。痛みとも快感とも付かない感覚に襲われたマサキは、腰を逸らせて声を上げた。やめ、シュウ。やめろって。腕を掴んで抵抗するマサキに、まだですよ。シュウがそう囁きかけながら、亀頭の膨らみへとロックアイスを滑らせていく。無理、無理。マサキは声を上げて何度も抵抗を試みた。けれどもそれで云うことを聞くような男でもなし。行為にあっては信じられないまでの強引さを見せる男は、この場にあってもその態度を崩そうとはしない。

陰茎から陰嚢、そして孔を開いているアナルの窪みまで。マサキの抵抗を跳ね除け

て更にロックアイスを滑らせてゆくシュウに、あ、あ、あ。凍るような冷たさに肩を竦めながら、マサキはその腕を引き剥がそうともがいた。びくともしない腕。何度も、何度も、何度も。繰り返し抵抗を試みてみるも、やはりシュウの腕はぴくりとも動かない。絶望的な気分になりながら、マサキはシュウの腕にしがみ付いた。仕方なしにその愛撫に身を任せる。

ひんやりとした感触が陰茎を滑ってゆく。温度こそ異なるものの、舌で舐め尽くされているようにも感じられる感触。そうこうしている内に、どうやら氷の冷たさに慣れてしまったのだろうか。ああ……と、マサキは自らの男性器から菊座を満遍なく刺激するロックアイスの動きに、マサキは反応せずにいられなくなった。溶けた氷が股間を濡らすようになって少しすると、それが緩衝材代わりとなったのか。それとも冷や過ぎて感覚が麻痺してしまったのか。それまでとは異なる冷ややかさ。温くさえ感じる刺激に、マサキはひく、と身体を震わせた。

そうなれば後は堕ちるだけだ。アナルの窪みを擦られたマサキは、はぁ……ああ……と、甘ったるい声を上げて腰を振った。痺れるような快感。少し先を押し込まれるの

が堪らない。もっと奥に咥え込みたい。そのもどかしさがより一層、マサキの男性器を熱くした。

「気持ちよくなってきたでしょう、マサキ。あなたの好みそうなプレイだと思ったのは、間違いではなかったようですね。痛みと快楽。そして、シチュエーション。三つ揃ったプレイがあなたはお好みのようだ」

陰嚢が縮み上がるような冷たさに晒されている筈なのに、快感を覚えずにいられない。異常な環境に在りながら、その行為にマサキは酔いしれてしまっていた。あっ、ああ、ああ。ロックアイスが肌を滑る。ああ、ああ、シュウ。再び亀頭の先端に押し当てられたロックアイスが、今度はじっくりと時間をかけてマサキの男性器を責め始める。

小さくなれば次、そうしてまた次と、消費されてゆくロックアイス。無条件に感じていられたのは僅かな時間だった。段々とマサキの男性器の感覚が失われてゆく。股間にある筈のものが無くなってしまったかのような感覚。まるで自分の身体が雄ではない何かに変えられてしまったかのようだ。

これでは反応のしようもない。

自然と反応が鈍くなるマサキに、シュウはようやくロックアイスを手放した。そうして空いた手をポケットの中へと差し入れると、運針用の針の三倍はありそうな太さの針が封入されたパッケージを取り出してきた。な、に……？　長く喘がされたマサキの身体は心地良い倦怠感に包まれていたけれども、それさえも一瞬にして醒めきるような衝撃。その針を一体何に使うつもりなのか。マサキは怯えずにいられない。滅菌処理のされた針ですよ。噬いながら答えを口にしたシュウが、パッケージを破って中身を取り出す。そして右手に針を抓んだシュウは、感覚の無くなったマサキの男性器に左手を伸ばしてきた。亀頭と陰茎の境目にある一番膨らんだ部分の皮が抓まれる。大丈夫ですよ、一瞬で済みますからね。その言葉にまさかとマサキは目を見開いた。

まさか、そんなことが――と考えきるより先に、何とも表現し難い音を立てて、針は皮を貫通していた。冷え切った男性器の感覚は失われたままだったし、針が通って尚、痛みを感じることすらないままだったけれども、男性を男性たらしめている象徴（シンボル）に針を立てられたという現実は、少なからずマサキにショックを与えた。何で、何で。

血を流している自らの男性器を目の当たりにすれば混乱もする。壊れた蓄音機のように言葉を重ねるマサキにガーゼで流れた血を拭き取ったシュウが、特注品ですよ、と両端に光り輝く小さな石をあしらったピアスらしき物体を片手に、それを掲げてマサキに見せてくる。そうして、さもそれが当然の権利とばかりに、今開けたばかりの穴へと嵌め込んでくる。

まるで誂えたようにぴったりと嵌まるピアスが、寝室のライトの光を受けて煌めいた。

純銀製のダイドー・ピアスですよ。云いながらマサキの男性器に消毒を施したシュウに、ダイドー・ピアス？　思考が上手く働かないまま、マサキは尋ねていた。性器に嵌め込むピアスの一種ですよ。綺麗でしょう。何故、どうして、そんな問いは無意味とばかりに淡々と傷痕の処置を進めているシュウは、次いでマサキの男性器にコンドームを被せてきた。

「後で殺菌用の石鹸と、傷痕の保護用にコンドームを渡しますよ」

そしてしげしげと、芸術品を鑑賞するような目つきでマサキの男性器に嵌まったピ

アスを見詰めてくる。何で……答えなど得られないに違いないと思いながらも、マサキは再びシュウに尋ねた。何で、こんなことを。

「あなたを私のものにしたかったからですよ」

ぞっとするほどに美しく、そして非情な眼差し。紫水晶を思わせる瞳が暗く輝いている。性行為（セックス）には影響はないとはいえ、その性器をあなたは他人の目に晒せますかね。そうしてさも愉し気にふふ……と嗤ったシュウは、マサキの頬に優しく手を添えて口付けを落とした後に、ピアスを外しても痕の残るその性器を、と続けた。

「いつ、俺が他人にわざわざ見せるって云うんだよ」

「あなたの周りには、あなたを独占しようとする女性が複数いますからね。いつ間違いを起こさないとも限らない。それにそれは女性に限った話でもなさそうだ。そうした誘惑に、いつあなたが転ばないとも限らないでしょう」

「そんなこと、ないに決まってるだろ」

徐々に熱を取り戻し始めた男性器に、今更ながら感じる鈍い痛み。自らの選択で付けられた傷ではないだけに、遣り切れない思いが残る。マサキは眉を顰めながら、勝

手に付けられたピアスをコンドームの薄い膜越しに眺めていた。
　膜の下からでも光り輝いてみせる石の煌めきは、まるでシュウの汚れなき心の有り様を表しているようだ。マサキははあ……と溜息を洩らした。執着心の強い男だとは思っていた。それがこれほどとは。怒りたい気持ちはあれど、歓びを感じてしまっている自分もいる。自らの心を上手く整理できないマサキに、シュウはその端正な面差しに不釣り合いなまでに嗜虐的な笑顔を浮かべてみせた。
「私はね、マサキ。二度と他人に裏切られたくないのですよ」
　呟くように言葉を吐いたシュウは、何事もなかったかのようにマサキに服を着せ始めると、お茶にしましょう、マサキ。短くとも二ヶ月は性行為は控えた方がいいらしいですからね。揶揄うように言葉を継ぐと、マサキの手を引いてベッドを後にしてゆく。

pierced earrings of blood

マサキが腰にタトゥーを入れることを決心したのは、それがシュウの勧めだったからだった。勿論、日常生活に制限が出るタトゥーを勧められるがままに身体に彫り込むなど、いくら股間にシュウの手で嵌め込まれたピアスをがあるとはいえ、昔気質な性質を持つマサキが躊躇わなかった筈がない。

親から与えられた身体だ。自ら傷を付けるなど以ての外。ましてや一生残りかねない傷を、アクセサリーを飾るような感覚で付けるなど、幾らそれが情を立てる為の手段であっても無道に過ぎる。それだのにマサキは最終的にシュウの提案を受け入れてしまった。腰に片羽根のタトゥーを入れる。ファッションアイコン的なデザインは、マサキだけではなくシュウの腰をも飾った。右の翼はマサキの腰に、左の翼はシュウの腰に。並んで肩や腰を抱かれた時に、番となる片羽根のタトゥー。それをマサキが彫り込む決心をしたのは、シュウの執着心とも、独占欲とも、占有欲ともつかない自

分に対する感情を鎮める術を他に持ち得なかったからだ。

――あなたの性格でそんな場所にピアスが入っていると思う人はいないでしょう、マサキ。だから、ですよ。もし仮にあなたが私から離れてゆく時が来たとして、その後に新たなセックスのパートナーを得たとしましょう。彼ら、或いは彼女らはあなたに絶対にそのピアスの意味を尋ねることでしょう。尋ねないにしても疑問を覚えるに違いない。そうした彼らの態度を見るにつけ、あなたは私を思い出すことになります。

あの日。マサキの男性器にピアスの穴が開いた日に、ベッドからマサキを連れ出したシュウは、マサキとともに午後のティータイムを過ごしながら、何ら感慨を感じさせない瞳でそう云った。

――そう、例え他人となったとしても、私の存在は無くならない。私はあなたと生涯をともにする決心が出来ているのですよ、マサキ。

別段、何かがあった訳ではなかった。ただ何気なく読んでいた雑誌で、ボディピアスの特集を目にしただけなのだという。シュウにとってはその程度のささやかな切欠（きっかけ）。けれどもそれは天啓を授かったような気分にさせた切欠でもあったようだ。

――ピアッシングの世界も奥深いものですね、マサキ。穴を開ける部位によって、見え方がまるで違ってくる。それを醜悪（グロテスク）と見るか、芸術的（アーティスティック）と見るかは評価が分かれるところではありますが、少なくとも私はあなたを飾りたくなる程度には、そこに芸術性を感じましたよ。

今更不満を口にしても過ぎてしまったこととは云え、せめてひと言云ってからにして欲しかった。そう口にしようとしたマサキの言葉に言葉を被せてきたシュウは、口元にうっすらと笑みを浮かべながらこう口にした。そうしてあなたを私に縛り付けたかったのですよ――と。

二ヶ月から最大で六ヶ月にも及ぶらしい禁欲生活。男性器という雑菌が繁殖し易い部位に穴を開けられたマサキは、シュウとともに過ごす時間に他に集中すべきことを得たかったのだ。シュウにタトゥーを彫ることを勧められてから、答えを出すまでに要した時間は三日間。自宅のベッドの上でひたすら答えを探し続けたマサキが、結果的に覚悟を決めてシュウの許を再び訪れたのは禁欲生活一ヶ月目のことだった。

そこから二ヶ月間。魔装機神の操者としての務めを果たしながら、その暇を縫って

シュウとともに彫り師のところに通い続けたマサキは、少しずつ形になってゆく片羽根のタトゥーを、まるで自分以外の誰かの身体を覗いているような感覚で眺め続けた。天に羽ばたく上向きに開いた翼。根元から徐々に羽根の先へと形を露わにしていくタトゥーは、同じ速度でシュウの腰部にも彫り込まれていった。完成するのが楽しみですよ。今日の分を彫り終えては、ふたりで過ごす時間に、シュウはそう云っては、マサキに彫り込まれたタトゥーを服の上から慈しむように何度も撫でてきたものだった。

そうして長い禁欲生活を慰めるように口付けを交わしては、そうしてまたそれぞれの日常へと帰ってゆく。

そういった逢瀬を繰り返した禁欲生活三ヶ月。揃いのタトゥーを彫り終えても、マサキの禁欲生活は終わらなかった。流石に自らの性の象徴（シンボル）を失いたくないマサキは真面目に消毒に励んだものの、如何に戦場での衛生経験があるとはいえ、素人であるシュウが空けた穴である。経過の判断は知り合いの口の堅い医師に任せますよ——そう告げられて向かった病院。経緯を知った医師は盛大にシュウとマサキを叱ったものだったが、幸い雑菌が繁殖しているといったことはなかったようだ。とはいえ、治癒の経

過には個人差がある。結局、マサキがコンドームを外すことが出来るようになったのは、禁欲生活が始まってから四ヶ月が過ぎてからのことだった。

長い禁欲生活の終わりを医師に告げられたマサキは、シュウに連れられて辿り着いた彼の家で、即座にベッドルームへと招き入れられた。脱いでみせて。そうシュウから声をかけられたマサキは途惑った。性交時に脱がされることに慣れているマサキは、自ら服を脱いだ経験があまりない。ほら、マサキ。したいのでしょう。続けてかけられた声にマサキは小さく頷いた。

シュウの視線に晒されながら服を脱ぐことに抵抗を感じたものの、ようやく迎えたこの日。シュウの機嫌を損ねたくないマサキは、上着に手を掛けた。

これまでにも、長く肌を合わせないことはあった。魔装機神の操者であるマサキに、在野の研究者でもあるシュウ。多忙が日常のふたりは、二、三週間ぐらい顔を合わせないこともざらだ。だからこそシュウはその都度マサキを求めてきたものだったし、マサキもその都度シュウの求めに応じてみせたものだった。そして会えなかった日々の不足を埋めるように肌を重ね、愛欲に耽り、欲望を消化する。けれども我慢を重ね

なければならない日々に、自慰を我慢して挑んだのは初めてのことだ。
はち切れそうなまでに膨れ上がってしまっている欲望は、簡単に抑えきれるものではなくなってしまっている。うっすらとした笑みを湛えながらベッドの端に腰掛けているシュウの目の前で、マサキは躊躇いながらも、一枚、また一枚、と衣服を脱いでいった。首に、胸に、腰に、股間に絡み付く視線。気恥ずかしさを押し殺して一糸纏わぬ姿になったマサキが面を上げると、ほらとシュウの手が差し出される。
膝上へと誘われたマサキはその手に誘われるがまま、背中をシュウの胸に預ける形で腰を下ろした。早速とばかりに背後から伸びてきたシュウの手が、マサキの男性器に触れてくる。亀頭の裏側に確かに存在している純銀製のピアス。両端に光り輝く石の付いたピアスの存在を、マサキの男性器を持ち上げて確認したシュウは、素敵ですよ、マサキ。そう耳元で囁きかけてくると、ポケットから新たなピアスを取り出してきた。
両端に少し小振りな大きさの赤い硝子玉の付いたピアス。マサキの目にはそう映ったピアスを、それまでのものと交換したシュウは、新たにマサキの男性器を飾ったピ

アスに満足そうに微笑むと、ブラッド・ピアスですよ、と云った。
「ブラッド・ピアス？」
「私の血で作ったピアスですよ」
どうやってと尋ねたマサキに、シュウが答えて曰く。真空の硝子玉に採取した血液を流し込んだものなのだそうだ。割れない厚さの硝子玉にする関係上、どうしても粒が大きめになってしまうらしいが、他に類を見ない世界にひとつだけの飾りの付いたピアスが完成する。
マサキの背中が、ぞくり、と震えた。
それはシュウがマサキに向けている占有欲の結実でもあった。マサキの大事な部分でもある男性器に、自らの血液で作ったピアスを嵌め込む。既にシュウがマサキに語って聞かせている通りに、もし仮にマサキがシュウの許を離れたとして、新たなパートナーと性行為に及ぶことになったとしても、これでは平穏な気持ちでは行為に励めない。
亀頭の裏側に隠れるようにして存在しているたった数センチのゲージのピアス。勃

起した状態でなければ人目には触れない位置にあるからこそ、シュウの血液で作られた飾りを得たピアスは、その事実を突きつけられたマサキの心と身体を雁字搦めに縛った。

「出来ればこちらを付けていて欲しいですけれども、少し粒が大きいですしね。これまでのものは帰りに渡しますよ。生活し易い方を選んで付けるといいでしょう」

そんなピアスを外して生活出来る筈がない。いい、と首を振ったマサキに、これはこれで特注品なのですよとシュウは小さく声を上げて笑った後に、そうっとマサキの男性器に手を這わせてきた。びくっとマサキの身体が揺れる。そのまま亀頭の先端を指の腹で擦られたマサキは、ああっ、と早くも声を上げた。谷間を描く緩いカーブを割るように、何度もシュウの指が動いている。

——あ、あ、やだ……少し、待って……

おかしいとは感じていたのだ。先程もそうだった。少しばかりシュウがピアスの存在を確認する為に触れてきただけでも、男性器の底から快感が駆け上がってきた。禁欲生活の長さが自らの身体を敏感にさせているのだろうか。即座に熱を帯びて硬さを

増した自らの男性器に、マサキはそう考えながらも途惑いを隠し切れない。過敏に快感を拾い上げる自らの男性器は、そうでなくとも性感帯だらけであるのに、マサキの与り知らぬところでその数を増やしてしまったかのようだ。まだ僅かな時間しか経っていない筈だのに、マサキはもう、大人しくシュウの膝の上に座っていることすらままならない。

首の位置を保っているのですら難しい。マサキはシュウの肩に頭を置いて、何度も腰をしならせた。

――はあっ……ああ、あ……っ、シュウ、や、そこやだ……

甘ったるいマサキの声がベッドルームに、遠く、近く。言葉を変えては反響を繰り返す。いくら歯向かってみせたところで、これでは抵抗も形無しだ。ああっ、ああ。止め処なく溢れ出る喘ぎ声。天を仰ぎながらマサキが喘いでいると、気持ちいいでしょうとシュウが嗤った。

「ここに穴を開けると感度が増すそうですよ、マサキ。人によってはピアスがあることで生じる違和感に耐えられなくなることもあるそうですけど、あなたはそうではな

かったようですね。まだ先端を少しばかり弄っただけだというのに、もうこんなに男性器を硬くして。お陰で愉しみが増えましたけれども」

ぞっとする台詞を吐いたシュウは、そこから時間をかけてじっくりとマサキの男性器を嬲った。亀頭を摩っては、陰茎を扱き、それぞれを少しだけ繰り返しては陰嚢を揉む。全体的に感じ易くなっている男性器だたけれども、特にピアスに近い亀頭周辺は敏感さを増しているようだ。僅かに触れられただけでも、襲い掛かる快感の量が倍以上に及ぶ。マサキは喘ぎに喘いだ。まだ達っては駄目ですよ。シュウはそう云いながら、時々マサキの陰茎を根元を強く握った。

痛みで正気に返されては、また快感に理性が剥がされる。きっとシュウにとって今のマサキは、自らの思い通りに動く人形のようなものであるのだろう。そのぐらいにマサキはシュウの愛撫に翻弄されてしまっていた。はあ、ああっ。力の上手く入らない身体。わななく口唇は閉じることも難く、口の端から涎を溢れさせてしまっている。

――いい、いいから、シュウ。早く達かせて……

どれだけそうして焦らされ続けていたのかわからないほどに時間が経った頃。マサ

キが形振り構わずに懇願をするようになったのを見計らったかのように、シュウはマサキの両膝を抱え込むと大きく脚を開かせた。肩口から覗き込んでくるシュウの視線が、膝の上で双丘を開いている臀部の中央に注がれる。こんなに口を開いて。早くと待ち望む気持ちが菊座を収縮させてしまっているのだ。それを指摘されたマサキは、自らの欲望の深さを目の当たりにさせられたことに恥ずかしさを隠し切れずに。反射的に顔を伏せていやいやと首を振ると、その所作が堪らなく感じられたのだろう。シュウは揶揄い混じりの声でこう言葉を吐いてきた。

「欲しくないの、マサキ」

欲しいか欲しくないかの二択でいったら、それは欲しいに決まっている。何度も何度も軽いドライオーガズムを感じながら、次第に頂点に上り詰めてゆくあの感覚。それは男性器を弄られているだけでは味わえない感覚だ。マサキは再び首を振った。だったら、と口唇にシュウの指が触れてくる。シュウは上唇から下唇へと、マサキの口唇の形に沿って指先を這わせながら、

「ちゃんと云って。この口で」

そして再び亀頭を摩り始めた手のひらに、マサキは身体を震わせて細くも短い喘ぎ声を何度も放った。その合間にシュウにねだった。欲しいから、挿れて。俺の×××の中に、シュウの×××を挿れて。次の瞬間、身体を引き倒されたマサキはベッドの上。はあ、と深く息を吐き出して解放感に浸ったのも束の間。ぐっと二つに折り曲げられる身体。両脚を深く抱え込まれた根元にある菊座の窪みに、シュウの男性器が押し当てられる。

ずるり、と孔の中に入り込んできた男性器が、あっという間に奥まで捻じ込まれ、限界まで焦らされた身体が歓喜の咆哮を上げる。その瞬間、マサキは今まで堪えていたものが一気に弾け飛んでゆくのを感じずにいられなかった。

――ああ、ああ、ああ……

足を突っ張らせながら、長く続く嬌声とともに精を放ったマサキは、それを終えた後にも続く余韻に暫く身体を震わせ続けた。やがてシュウがふふ……と密やかに嗤う。これからの愉しみが増えましたよ、マサキ。膝から片腕を抜いたシュウは、マサキの身体を二つ折りにしたまま。抜いたその手でマサキの男性器に触れてくると、過敏に

反応する身体を休ませることもせず、自らの昂った男性器をマサキの菊座の中で抽迭(ちゅうてつ)させ始めた。

繰り返すだけでなく、時として連続して襲ってくるドライオーガズム。マサキは啼(な)いた。何度も何度も声を上げて啼いた。四ヶ月分の性欲を解消するようにマサキを求めてくるシュウに応えるように、マサキもまたシュウを求めた。その果てに。マサキの身体を蹂躙しきったシュウが　ついに男性器を抜き取った。どろりと孔の奥から垂れてくる精液の感触。何度も精液を注ぎ込まれたマサキの菊座は、その射精の跡がありありと窺える状態だった。

もう一滴たりとも精液が出そうになければ、腕をついて立ち上がる気力もない。ぐったりとベッドに伏せるしかなくなったマサキの背中に、同じく疲労を感じているらしいシュウの身体が圧し掛かってくる。一週間あっても足りない。その重みを感じながらそうシュウが呟くのを、ぼんやりとした頭でマサキは聞いていた。

自身が企んだことであったとはいえ、シュウをしても四ヶ月の禁欲生活は相当に堪

えるものであったようだ。考えられたことはそれだけだった。少しの間、そうしてマサキは背中でシュウの重みを受け止め続けた。ややああっておもむろに上半身を起こしたシュウが、完成したマサキの腰部の片羽根のタトゥーを、いつものように。けれども今日は布越しにではなく、肌の上から。愛おし気に撫でてきた。

「自由の先に広がる世界を見たいのですよ、マサキ」

「だから翼にしたって？」

「そう。どこまでも羽ばたいていけるように」

そう云ったシュウは、マサキの身体を起こさせると、向かい合わせに膝の上に乗せた。そして口付けを一つ。続けて二つ。次いで三つ……何度もマサキの口唇に触れてきたシュウは、先ほどまでの激しさはどこに消えたのか。壊れ物を扱うようにマサキの身体を抱き締めると、その耳とで。かつて聞いたことがないぐらいの優しさに満ちた声で言葉を奏でた。

——あなたは私のものだ。

眩暈がするほどの恍惚感。これを超える快楽はこの世に存在しない。

誰かに必要とされ、その誰かに所有される。孤独を知るマサキにとって、シュウの執着心はこの世に自分を繋ぎとめてくれる縁（えにし）であるのだ。わかってるよ、そのぐらい。マサキは深く頷きながらそう答えて、そっと、傷が走るシュウの鎖骨に顔を埋めた。

half earring

騙し打ちのようにして開けられた男性器へのピアス穴を、マサキが怒ることもないままに赦してしまったのは、それが日常生活においてそこまでの影響を及ぼさないものであったからだ。

亀頭の裏側。何かの機会に他者に裸体を晒したとしても、そう簡単には目が届かない位置にてひっそりと、隠れるようにして存在しているブラッド・ピアス。勿論、マサキとしては他にシュウの感情を鎮める術を持たなかったからこそ、ピアスを装着して日常生活を過ごすことを受け入れたのであったし、そうした忍従の上に成り立つ態度が何処から来るのであるかと問われれば、愛情以外の何者でもないと答えたことだろう。

けれども、片耳にピアスを開けて欲しいと云われたマサキは、流石にそれはと態度を濁すことしか出来なかった。

既に腰に片羽根のタトゥーを入れてしまっている。股間のピアスは見つかり難くとも、こちらはひと目でそれと知れてしまう位置にある。しかも、そこまでファッションに拘りを見せないマサキの肌に刻まれた片羽根のタトゥーは、他人からすればファッション以外の意味を持つアイテムにしかならないときたものだ。だからこそ、どうせ肌を晒せないのであれば、まだ男性器にピアス穴を増やす方がいい。マサキはそう云い張ったものだったけれども、シュウには他の目論見があるようで、貫通式のピアスが駄目ならせめてマグネットピアスだけでも、とマサキに追い縋ってきた。

日常的にしないで済むのであれば、その願いを受け入れるのは難しいことではない。マサキはそれらのアイテムで身体を飾っている理由を他人に尋ねられるのが嫌なだけなのだ。考えてみればいい。これがマサキの周りにいる女性陣の誰かであったら、ファッション的な感覚で付けたのだろうと即座に誰もが納得をしてみせるだろう。わざわざ尋ねてまで、そうしたアイテムを付け始めた理由を知ろうとは思わない。

だのに彼らはそれがマサキであるというだけで、理由を知ろうとし始めるのだ。

いつだったかマサキは自分で指輪を買ったことがあった。露店で見かけた指輪は、

太いリングに捻れたリングが被さっているだけのシンプルな意匠（デザイン）だった。何の気なしに手にして、何の気なしにひとつぐらいはあってもいいかもなと思って買ったファッションリング。他の意味などあろう筈がない。それなのに、マサキの左手の人差し指を飾った指輪に、周囲の人間たちは口々に理由を尋ねてきたのだ。

——何故？　どうして？　どんな気紛れ？

いいと思ったから買った。彼らは素直に答えたマサキの言葉を信用できなかったようだ。指輪の意匠（デザイン）から理由を読み取ろうとしては、彼是（あれこれ）と邪推を働かせてくれたものだった。

だからマサキはそうしたファッション的なアイテムに、忌避感を覚えてしまうのだ。

そうした自分の気持ちを押さえ込んで、男性器にあるピアス穴に嵌め込んだブラッド・ピアス。腰を飾る片羽根のタトゥーもそうだ。もう充分にシュウの気持ちに自分は応えただろう。マサキがそう思ってしまうのも無理なきこと。けれどもシュウは退こうとしない。似合うと思わなければ勧めませんよ。と、どうやら既に用意していたらしいマグネットピアスをちらつかせてくる。

マサキの髪の色に合わせた萌葱色の石が嵌まったピアスは、それならば髪に紛れて見付かり難そうではある。石のさりげないサイズは、更にピアスの存在を見付け難いものとしてくれるだろう。それだったらとマサキはマグネットピアスを左耳に嵌めた。よく似合うと満足げなシュウの表情に何とはない気恥ずかしさを感じながら、その手に導かれるがまま。シュウの膝の上に腰を落としたマサキは、腰に回された手に己の手を重ねた。

結局の所、マサキはシュウに対して甘いのだ。稀に見せる我儘な子供のような一面でさえも愛おしいと感じてしまうぐらいに、自らを頼りとし縁とする年嵩の男に心を囚われてしまっている。それをマサキは恥ずべきことではないと考えていたし、むしろ誇らしささえも抱いていたけれども、だからといって、声を大にして自分たちの関係を公にしたいとまでは思えずに。

股間を飾るブラッド・ピアスのように、ひっそりとした関係でいい。

マサキは親しい仲間にさえ打ち明けられない秘密を抱えている自分が好きなのだ。お節介にあれこれと差し出がましい口を利いてくる仲間たちをマサキは嫌ってはいな

かったが、プライバシーが筒抜けになってしまう環境には思うところがある。シュウとの関係はそうした意味で、マサキにとっては大事なプライベート部分だ。誰にも侵されたくない領域に置いておきたい関係。だからこそマサキは口を堅くして、誰に問われてもこの関係を打ち明けずにいる。

――穴を開けたくはならない？

早速とばかりに左耳に囁きかけてくるシュウに、ぴくりと身体を震わせながら、マサキはならねえよと答えた。元来耳が弱いマサキは、特に左側にその傾向が顕著だ。残念。云いながら耳朶を食んでくるシュウに、行為の始まりを感じ取ったマサキは、重ねた手がジーンズのボタンを外しにゆくのを止めることもせず。

――……何で、左耳なんだ。

片耳だけとシュウが要求したピアス。この男がさしたる理由なくして頼み込んできたりもしないだろうとマサキが尋ねてみれば、クック……と、シュウは耳朶から口唇を剥がして嗤った。あなたの感じ易い場所だからですよ、マサキ。そう云って、ピアス穴を開けて以来感度が増した男性器に触れてくる。陰茎に手を添え、亀頭を指で弄

び……ゆるゆると蠢くシュウの指。次いで左耳を舌で嬲られたマサキは、早くも自分を抑えるのが難しい快感に襲われて、身悶えずにいられなくなった。

――出来れば乳首にも嵌めたいぐらいだ。

こうと決めた願いを叶えずにいられない男だ。いつかはその望みの実現の為に行動を起こしてみせるだろう。その時の自分はどうすればいいかわからなくなるに違いない。マサキは悩んだ。秘めやかに増えてゆく自らを飾るファッションアイテム。身体の中に隠されたそれらのアイテムは、シュウの支配欲の表れも相俟って、マサキを新たな世界へと誘(いざな)いつつあった。

雁字搦めに縛られたい。そして甘い快楽の世界で飼い慣らされたい――。外の世界で他者を率いて戦いの場に赴いているマサキは、そうした生活から解放されたいとまでは思ってはいなかったものの、プライベートな時間でぐらいはその重責から解放されたいと望んでいる。そう、その為であれば、ピアスの穴を増やしてもいいと思ってしまうほどに。

――あ、ああっ。シュウ、して、もっとして。

その手と口唇の動きに翻弄されながら、マサキは貪欲に愛撫を求めた。身体のそこかしこが更なる刺激を求めて疼いている。首筋に、鎖骨。乳首に脇腹。腿の内側に、足の指だってそうだ。マサキですら知らなかった性感帯を時間をかけて花開かせていった男は、その求めに応じるようにマサキの身体を様々に弄んでみせた。

――愛してますよ、マサキ。とてもね。

マサキの心を縛り付けるように、そうっと。シュウは左耳を飾るピアスに熱い吐息を吹きかけながら、甘い言葉を囁きかけてきた。嗚呼――と、マサキは溜息に似た喘ぎ声を洩らした。これでいい。またひとつシュウを満たしたのだとその言葉から感じ取ったマサキは、忘我しながらシュウの愛撫に堕ちていった。そして、逆らいきれない本能の赴くがまま。淫語混じりにシュウ自身を求める言葉を吐いた。

夜にまぎれて

胸を掻き毟るようにして喘いでいた。

心地の良くない声で目覚めたシュウが、そのまま隣に眠るマサキの様子を窺っていると、程なくしてその身体が大人しくなった。けれども苦しみが消えたのではないようだ。直後、うっすらとその眦から一筋の涙が零れ落ちる。

「父さん……母さん……」

嗚呼、彼は繰り返したくない時の流れの中に居るのだ。そう悟ったシュウは、幼くして両親を喪ったマサキの境遇に、同情の念を禁じ得なかった。

ふたりでこうして時に寝屋をともにするようになってから知ったマサキの孤独。地上世界で生きていた折から、彼はこうしてひっそりと癒えぬ悲しみに夢をも支配されて来たのだろう。抗えない運命に肉親を奪われる。その理不尽さをシュウは別の意味で知っていたけれども、だからといってマサキの気持ちを理解してやれるほど、当時

のシュウはマサキに近しい境遇にあった訳でもない。立場ばかりは恵まれていたシュウと、そうした立場を持たなかったマサキ。シュウにしてやれるのは、苦しみを繰り返すマサキの身体に寄り添ってやることだけだ。

やがて、なんで……と、その口元から言葉が零れ落ちる。自らを襲った運命の理由を尋ねるマサキの空虚さが増す寝顔の何と物寂しいことか。心に湧き立つ感情を抑えきれなくなったシュウは、咄嗟にマサキの身体を抱き締めていた。「大丈夫ですよ、マサキ」こうしてマサキが過去にうなされる度にかけてきた言葉を今また囁きかけながら、シュウもまた自らの過去へと思いを及ばせていた。

――私たちは、取り戻せない過去を癒えない傷として生きている。

熱し易いマサキに、冷静さを欠かないシュウ。戦士の気が強いマサキに、文士の気が強いシュウ。一見して共通点が感じられないシュウとマサキには、けれども確かにふたりにしか通じ合わない何かが存在していた。噛み合う会話にしてもそう。噛み合う意思にしてもそう。それは恐らく、互いに負ってしまった傷が育んだものでものであっただろう。

シュウはより一層、強くマサキの身体を抱き締めた。

意識が醒めたのだろうか。それともまだ悪夢の最中にいるのだろうか。シュウの胸に顔を埋めて声もなく咽び泣いているマサキは、まるで寄る辺を持たない子供のようだ。そう、マサキはそうした苦難の時代を経て、この地底世界ラ・ギアスへと召喚されたのだ。

それから今に至るまで、マサキは表面上は快活に日々を過ごしてみせている。それは数多の戦禍を潜り抜けても変わらなかった。激情家であるマサキは容易く涙を流してみせたものだったけれども、自らの過去の傷に触れられてしまった時だけは別であるようだ。影に隠れるように密やかに。それはシュウからも逃れるようにして、マサキは誰にもその涙を見せぬように独りで泣いた。

それがマサキの矜持なのかはわからない。けれども、その現実は酷くシュウの胸を疼かせた――……。

――悪い。俺、また……

ひとしきり泣いたマサキは、どうやら明瞭りと目を覚ましたようだ。何度目の醜態

に詫びる言葉を吐き、もう大丈夫だからとシュウの腕から逃れようとする。シュウはそのマサキの身体をベッドに組み伏せた。困惑する表情がシュウに向けられる。けれどもシュウは自らの無体を慎もうとは思えぬまま、マサキの口唇に自らの口唇を重ねていった。

過去へと心が降り戻される夜。思い出したくない過去に思いを馳せてしまったシュウは、マサキの傷を目の当たりにすることで、自らの心を慰めてしまっている自分に気付いていながらも、その悪癖を正そうとは思えずに。ほら、マサキ。愛おしさよりも征服欲が勝る相手と深く繋がるべく、その身体を開かせていった。

Piercing

発行日　2022 年 7 月 24 日

著者　@kyo
https://www.pixiv.net/member.php?id=5201329

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。